

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

飢餓海峡

1964年/日本映画
配給：東映/182分

2020(令和2)年8月25日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

Data

監督：内田吐夢

原作：水上勉『飢餓海峡』

出演：三國連太郎/左幸子/伴淳三郎/高倉健/加藤嘉/三井弘次/沢村貞子/藤田進/風見章子/亀石征一郎/菅根秀介/安藤三男/最上逸馬/岡野耕作/高須準之助/山本麟一/沢彰謙/志摩栄/菅沼正/関山耕司/鈴木昭生/八木貞男/外山高士/進藤幸/安城百合子

👁️👁️ みどころ

『没後50年』の企画で、内田吐夢監督がはじめて現代劇に挑戦した本作の重厚さを再確認！『津軽海峡冬景色』のヒットは1977年だが、敗戦直後の1947年9月20日に発生した「屠雲丸沈没事件」の混乱の中、津軽海峡をボートで渡った3人の男たちの運命は？

この刑事、『砂の器』を彷彿！この男、ジャン・バルジャンを彷彿！そんな2人の男の“追跡劇”は、重厚な犯罪ドラマ、人間ドラマだが、本作では思いがけない大金をもらった“薄幸の女”八重の圧倒的な存在感にも注目！

舞台は津軽海峡を挟んだ北海道と下北半島から、東京へ、さらに舞鶴へ。後半からは高倉健扮するもう1人の刑事も登場するが、慈善事業家の樽見は、10年前の髭面で力持ちの大男・犬飼と同一人物？そんなストーリーも『レ・ミゼラブル』を彷彿させるが、本作では神父サマではなく、弓坂刑事の読経に注目したい。

しかして、本作のあっと驚く意外なラストとは？それはあなた自身の目でしっかりと！その是非は？賛否は？

■□■内田吐夢監督、満州から日本へ！時代劇から現代劇へ！■□■

今ドキの人は、内田吐夢監督と聞いても何も知らないだろう。しかし、もしシネ・ヌーヴォが今回企画した『没後50年 映画監督 内田吐夢』（7月25日～8月28日）に興味を持てば、Wikipediaで彼の何とも言えない数奇な人生を確認してもらいたい。

1926年に日活に入社した彼は、左翼思想を盛り込んだ「傾向映画」の傑作を次々と生み出した後、満州に渡り、満州映画協会に在籍したが、日中戦争は彼にどんな影響を与えたの？満映の理事長だった甘粕正彦の自決現場に立ち会うという大変な体験をした彼は、

敗戦後も帰国せず、中国に残って映画製作に関与する等、今の時代には到底考えられない経験を経て、1954年に日本に復員した。東映に入社した彼は、以降『大菩薩峠』全3部作、『宮本武蔵』全5部作、そして本作を代表とする多くの作品を監督した。私がリアルタイムで観たのは、『人生劇場 飛車角と吉良常』(68年) だけだが、『宮本武蔵』全5部作は劇場でも観たし、TVでも何度も観ている。

そんな時代劇オンリーだった(?)内田吐夢監督に、現代劇を作らせたのは、のちに東映の社長になった、当時東京撮影所所長の岡田茂だ。『飢餓海峡』は水上勉原作の小説で、当時単行本として出版されたばかりだったそうだが、既に水上勉原作の『五番町夕霧楼』(63年)は、内田と同世代の田坂具隆監督の下、佐久間良子の主演で大ヒットしていた。そのため、本作の八重役も当初は岡田の推薦で佐久間良子が予定されていたが、急遽内田監督の判断で左幸子に変更されたようだ。また、Wikipediaによれば、岡田は三國連太郎を嫌っていたため、「三國の主演なら撮らせたくない」と内田に伝えたところ、内田は「これは三國以外にやれる人間はいないから、三國でなければ俺が降りる」と押し切ったそうだし、高倉健の起用も内田の意向とのことだ。さらに、完成時192分に及んだ本作については、編集(カット)を巡ってひと悶着あったらしい。そんなこんなのトラブル続きの中で本作が完成したわけだが、さて、内田吐夢監督初の現代劇挑戦の成否は?

ちなみに、私が映画検定3級を受験するについて勉強した『映画検定公式テキストブック キネマ旬報映画総合研究所 編』では、『五番町夕霧楼』も『飢餓海峡』も「見るべき映画100本 日本映画編」に入っているが・・・。

■□■昭和22(1947)年!時代の検証をしっかりと!■□■2

本作の制作・公開は1964年だが、時代設定は終戦直後の昭和22(1947)年。冒頭のシークエンスは、昭和22年9月20日に、東北・北海道方面を襲った台風10号によって、青函連絡船の層雲丸が沈没する姿が描かれる。近時、気候温暖化が進む中、日本列島は、地震だけではなく台風や水害被害が続出しているが、この層雲丸事件は、死者530名を出す大惨事になった。スクリーン上にはその層雲丸が沈没するシーンが登場する。それはCGを含む撮影技術が進んだ今の時代から見ればいかにもチャチで、子供だましだが、それは1960年当時の撮影技術のレベルとしては仕方なし。それはともかく、2遺体について引き取り手が現れないとは、これ如何に?さらに、乗船客の数より死体の数が2体多いとは、これまた如何に?それだけでは警察が捜査を開始する根拠にはならないが、同じ9月20日に北海道岩内町にある佐々田質屋が襲われて惨殺されたうえ、放たれた火によって、町の8割を焼き尽くす大火になったとなれば、警察は捜査に乗り出さざるをえない。

私が本作をはじめて観たのがいつかは全然覚えていないが、本作から受けた衝撃は強かった。今回改めて劇場で鑑賞してそれを再確認したが、その理由の一つは、東映と内田吐夢監督が本作ではじめて採用した「W106方式」にあったらしい。これは16ミリで撮

影されたモノクロフィルムを35ミリにブローアップさせたもので、この方式によってザラザラとした質感や、現像処理で動く銅版画のような画調をもたらす「ソラリゼーション」効果を生んだらしい。それによって本作の映像は、それまでの日本映画のウェット感とは一線を画した渴いた硬質の印象をもたらしたようだ。

それはともかく、本作導入部では、一方では層雲丸沈没事件のニュース映像や人命救助の姿を描きながら、他方では網走刑務所を仮出所した沼田八郎（最上逸馬）と木島忠吉（安藤三男）、そしてその仲間である犬飼多吉（三國連太郎）の逃走劇が、交互に描かれる。ここでは、今ドキの美しいカラー映像とは全く異質なモノクロフィルムによるW106方式の素晴らしさにも注目！そしてまた、本作の鑑賞については、何よりも層雲丸沈没事件が起きた昭和22年（1947年）という時代をしっかりと検証したい。

■□■この景色！『津軽海峡冬景色』を彷彿！■□■

本作が公開された1964年は、東京オリンピックが開催された年。当時中学3年生だった私は、男ばかりの進学校である愛光学園で、勉強、勉強！と尻を叩かれながら、他方で、囲碁、将棋、映画、卓球、小説、音楽etcとさまざまな“脇道”に精を出していた。舟木一夫が歌った『高校三年生』（63年）の大ヒットは誰でも知っているが、玉置宏が司会していた日曜日の『ロッセ 歌のアルバム』を知っている人は？毎週1回ラジオから流れてくる『全国歌謡ベストテン』も1962年から始まったもので、私は毎週これを聴いていた。

他方、阿久悠作詞、三木たかし作曲の『津軽海峡冬景色』を石川さゆりが歌って大ヒットしたのは1977年。私が弁護士登録した1974年の3年後だ。私が大学に入学した1967年4月頃は、学生運動の高まりの中でフォークソングが全盛期を迎えていた。また、私が司法試験の勉強を始めた1971年頃には、グループサウンズが全盛期を迎えたが、1970年代は、阿久悠、三木たかしらをはじめとする多くの、演歌もポップスも大ヒットした時代。現在これらは「昭和歌謡」としてBS放送で盛んに放映されているが、『津軽海峡冬景色』の人気は今なお高い。その一因は、都はるみが歌った『北の宿から』と同じく、歌詞の素晴らしさにある。

私は愛媛県松山市の生まれだから、小柳ルミ子の歌った『瀬戸の花嫁』（72年）を聴くと、その歌詞とともに、自然に瀬戸内海の景色が浮かんでくる。しかし、青森へも函館へも行ったことがないうえ、宇高連絡船に乗ったことはあっても、青函連絡船に乗ったことがない私には（函館にはじめて行ったのは2013年）、本来函館と青森を結ぶ津軽海峡をテーマにした『津軽海峡冬景色』の風景は浮かんでくるはずはない。しかし、『津軽海峡冬景色』を聴いていると、そんな私でも津軽海峡の風景が浮かんでくる。そこには竜飛岬が本州の「北のはずれ」として登場するが、本作では、札幌や函館、網走の他に、岩幌や岩内町、七里浜、大湊等の地名が登場するが、さて、そのイメージは？

ちなみに、私が何よりビックリしたのは、青函連絡船で渡る津軽海峡は、暴風雨が吹き

荒れる中でも手漕ぎのボートで渡れること。被害者の救出で大混乱する中、ボートを借りて漕ぎ出した3人の男は、流れ着いた下北半島で証拠を隠滅するべくボートを燃やしたりしい。『津軽海峡冬景色』は美しい歌詞の中からこれぞ『津軽海峡冬景色』をしっかりとイメージすることができたが、さて、本作からはどんな津軽海峡を？

■□■この刑事！『砂の器』を彷彿！■□■

伴淳三郎と聞けば、森繁久彌、三木のり平、加東大介らが出演した東宝の看板映画だった『社長シリーズ』と並ぶ『駅前シリーズ』で、森繁久彌、フランキー堺と共に出演し、一時代を築いた俳優としてよく知られている。そんな伴淳三郎が、本作導入部では、層雲丸の遭難者を一人でも多く救助するべく走り回る姿が登場するが、当然その姿は『駅前シリーズ』の道化役とは違い、真剣そのものだ。そして、その後は函館署の刑事である弓坂吉太郎（伴淳三郎）が、強盗放火事件の犯人だとみなされた3人組を追って、相棒の若手刑事と共に捜査に邁進する姿が描かれる。

私が邦画の断トツのトップ1に挙げる映画『砂の器』（74年）は、冒頭、東京の蒲田で起きた殺人事件の犯人を追って丹波哲郎扮するベテランの今西刑事と、森田健作扮する若手の吉村刑事が捜査に邁進する姿が描かれていたが、本作導入部での弓坂刑事の懸命の捜査ぶりを見ていると、思わず『砂の器』の今西刑事を彷彿！もっとも、『砂の器』の前半で見たように、今西刑事の努力がほとんど無駄足だったのと同じく、弓坂の捜査もほとんどが無駄足だった。その原因の一つは、下北半島の大湊で犬飼とともに濃密な時間を過ごし、犬飼から望外の大金を受け取った八重（左幸子）が、犬飼を守るためシャーシャーと弓坂刑事に嘘をついたためだが、当時の弓坂としては、それ以上何の捜査もできなかったのは仕方ない。

さらに、上司から「早く証拠を掴んでこい」と発破をかけられて意気消沈していた弓坂は、沼田と木島の写真を見てビックリ！なぜなら、何とこれは弓坂が自分の目で確認した引き取り手のない2つの遺体の顔とそっくりだったからだ。なぜ、この2人が死体に？こりゃ、きっとあの3人組が津軽海峡を小船で渡る中で仲間割れを起こしたために違いない。すると、下北半島でボートを燃やしたのは男一人だけの力で？そんなことができるの？聞き込みで何度も確認した髭面の大男なら、一人でもそのくらいのことは可能だ！『砂の器』の今西刑事と同じようにそんな推理を働かせた弓坂は、借金を返済し、一人で東京に向かったという八重を再び追及するべく、10日間の出張の許可を得て東京に向かったが…。

■□■この男！ジャン・バルジャンを彷彿！■□■

私はヴィクトル・ユゴーの『ああ無常』＝『レ・ミゼラブル』を小学生の時に読んで感動した。それは、劇団四季のミュージカル『レ・ミゼラブル』をはじめて見た時も、映画の『レ・ミゼラブル』（12年）を観た時も同じだ（『シネマ30』48頁）。さらに、近時NHK総合で放映されたイギリス発のドラマ『レ・ミゼラブル』（全8回）にも感動した。

『レ・ミゼラブル』の物語と、その主人公ジャン・バルジャンの人物像はご承知の通り

だが、この男の一つの特徴は大男で力持ちだということ。その特徴は、映画『レ・ミゼラブル』では冒頭の巨大な船をロープで引いているシークエンスで表現されていたが、何より印象に残るのは、馬車の下敷きになった男を救うため、馬鹿力を使って一人で馬車を引き上げるシークエンスだ。今やマドレーヌ市長の立場にある男がそんな目立った行動をとったため、銀の食器を盗んだ犯人を執拗に追っているジャベール警部から注目され、次第にマドレーヌ市長＝ジャン・バルジャンという偽装工作が見破られていくわけだ。そんなストーリーを知っている私の目には、本作前半に見る髭面の大男・犬飼が、今は舞鶴で事業を営みながら刑余者更生施設に3000万円を寄付した男・樽見になりすましていて姿を見ると、思わず、この男！ジャン・バルジャンを彷彿！と思ってしまった。

東京の赤線地帯で働いていた八重は、その新聞記事の顔写真を見て、「これはあの犬飼さんに違いない」と確信。10年間ずっと犬飼への感謝の気持ちを持ち続け、その支えで生きてきた八重が、一言のお礼を言うために舞鶴へ向かったのは当然だ。しかして、今、和服姿で八重の前に登場した男・樽見は、ホントに10年前に見たあの犬飼？「間違いなく犬飼さんだ」、と主張する八重に対して、樽見は「知りまへんなあ、困りましたなあ」と否定したが、その手の傷を見ると・・・？

『砂の器』では、ある女が列車の窓から紙吹雪をまき散らす風景が新聞記事に掲載されたことがきっかけで、複雑な事件の糸口が少しずつ見えてきたが、本作では10年ぶりの八重と犬飼との再会が次の大きなドラマを生むことになるので、それに注目！なお、ここでも犬飼＝樽見が力持ちの大男であることが、書生の竹中殺しという次の悲劇を生むことになるので、その点にも注目！

■女優・左幸子にも注目！東北弁(?)がピッタリ！■

私が高高校時代に観た映画の中心は日活だったから、そこでは、吉永小百合、浅丘ルリ子、芦川いづみ、和泉雅子、松原智恵子等の女優陣を見るのが毎回の楽しみだった。もちろんそれ以外にも、松竹、大映、東映、東宝の女優達もたくさん見ていたが、女優・左幸子を見たのは、後にも先にも本作一本だけだ。佐久間良子はすごい美人女優で、前述したように本作と同じ水上勉原作の『五番町夕霧楼』で大ブレイクしていたから、本来なら八重役は岡田茂が推したとおりに、佐久間良子が演じるのが妥当なところ。ところが、内田監督の判断(独断と偏見?)によって、急遽左幸子に変更されたそうだが、さて、その理由は何？

その真相は知るべくもないが、本作では、“貧困の申し子”で、“薄幸の女”の典型のような女・八重の東北弁(?)が素晴らしい。女優なら誰でも、出演する役に応じて何弁であろうと、すらすらセリフをしゃべるのは当然だが、本作では八重役を演じる左幸子のセリフ回しはいかにもピッタリだ。ある日突然、思いもかけず大金を犬飼から受け取ったことによって八重の新たな人生が開けてきたわけだが、金の力によって借金を返したり、父親の病気を治すことはできても、堅気の仕事に就くことはやっぱりできなかったらしい。

その理由や時代状況についてはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、宝物のように大切にしていた新聞紙に包んでいた犬飼の爪を、頬ずりしながら恍惚の表情を浮かべている八重の姿、左幸子の熱演を見ていると・・・？そんな“薄幸の女”八重が、10年後に偶然見た新聞記事を契機として、わざわざ舞鶴まで犬飼を尋ねて行ったのは、ホントに一言お礼を言いたかったためだったから、それなら本来は本作のようなトラブル（事件）になる必然性はなかったはずだ。

本作は、三國連太郎、伴淳三郎、高倉健の3人がそれぞれの役柄で熱演を見せているが、女優としては、左幸子1人がストーリーの全編を担っているの、その東北弁(?)の熱演に注目したい。

■□■高倉健は刑事役もピッタリ! ■□■

2014年に亡くなった高倉健は、『昭和残侠传』(65年)をはじめとして、東映ヤクザ映画の大スターというイメージが強い。他方、かつての『幸福の黄色いハンカチ』(77年)や近時の『あなたへ』(12年)、『シネマ 29』210頁)等で見せた「寡黙な男」の役もピッタリだし、『君よ憤怒の河を流れ』(76年)を見れば、カッコいい検事役や逃亡犯の汚れ役もピッタリだ(『シネマ 18』100頁)。しかし、『砂の器』で観た丹波哲郎のような刑事役は？

『砂の器』は全編を通じて今西刑事と吉村刑事の新旧コンビが活躍するが、本作では、前半は弓坂刑事、後半は高倉健扮する味村刑事、そして、終盤は弓坂・味村両刑事の共演と言う役割分担をはっきりさせている。したがって、高倉健の登場は後半からだが、『砂の器』と同じように、彼の捜査の範囲は舞鶴から東京、下北半島から北海道へ、さらに網走へと広範囲にわたるので、それに注目!

舞鶴の海の中で遺体で発見された八重と書生・竹中の死体は、当初樽見の言う通り「心中説」によって処理(捜査)されていたが、八重の死体の中から樽見の新聞記事の切り抜きが発見されると、さすがにその見方は修正!今は網走の少年刑務所の看守をしている弓坂の元を訪れ、今なお続いている弓坂の執念を確認し、犬飼=樽見同一人物説=犯人説を確信した味村は、以降、互いの知恵を合わせていくことになる。もちろん、今は刑事を退職している弓坂の協力は公務ではなく手弁だから、北海道から舞鶴までの出張は大変だが、「あなたのお経を聴くと坊主はいらないよ」と言われるほどの読経の腕を持つ貧乏刑事・弓坂のそこまでの執念は一体どこから生まれているのだろうか?

本作の鑑賞については、内田監督の演出による、そんな視点もしっかり確認したい。

■□■あっと驚くラストは?この結末の是非は?賛否は? ■□■

「刑事モノ」、「犯罪モノ」では、互いの知恵と知恵をぶつけ合う、手に汗握る被疑者の取り調べシーンがハイライトになることが多い。本作も、北海道や下北半島への出張によって、犬飼が書いた宿帳のサインや、八重が宝物のようにしていた新聞紙に包んだ爪という物的証拠を手に入れた舞鶴警察の署長・荻村(藤田進)は、ついに樽見の出頭を求め、

味村刑事による理詰めへの追及に着手した。これだけの物証があれば、あっさり樽見は陥落し、涙ながらに自供を開始？一瞬そう思ったが、いやいや、なんのなんの。樽見のしぶとさは大したものだ。

10年前に必死に犬飼を追っていた弓坂刑事は既に退職しているから、犬飼＝樽見の取調権限がないのは当然。しかし、北海道へ戻る最後の日に、2人だけの“ご対面”を希望し、それを許された弓坂が留置室の中で樽見に見せたのは、弓坂が10年間大切に保管してきた、あのボートを焼いた灰だ。自分にとってもはや不要になった、と述べて、弓坂はこれを樽見の目の前に残したまま留置室を出ていったが、その後に樽見が見せた風景とは？そこでは、人間はここまで変わるのかと痛感させられる程の樽見の変貌ぶりを確認したい。

しかして、訪れるのは、いよいよ本作のクライマックス。それは、「もう一度、北海道へ連れて行ってくれ」との樽見のたつての希望を、舞鶴警察が受け入れたことによる舞鶴から北海道への旅だ。もちろん、これは味村刑事や若手刑事が同行してのものだし、弓坂の帰路も兼ねたものになっている。したがって、列車の中では手錠につながれた樽見の風景も見られたが、さて、青函連絡船の中では？長旅の中で多少の油断が生じるのは人間だからやむを得ない。また、長い時間の中、さまざまな想定外の出来事が生まれるのもやむを得ない。弓坂が、「目の前に見えるのが、八重の故郷である恐山だ」と説明したうえ、用意していた八重への手向けの花を海の中に投げ込んで読経したのは、弓坂流の1つの儀式。しかし、樽見にも同じように花を手渡し、同じ儀式を要請(?)したのは如何なもの？それによって、樽見の“あつと驚く行動”が生まれたわけだが、さて、その“あつと驚く行動”とは？

その行動は、『飢餓海峡』というタイトルにいかにもピッタリのものだし、「犯罪モノ」、「刑事モノ」の余韻を残したいラストとしてもいかにもピッタリだ。しかし、他方で、明確な結論を示さないままそんなクライマックスにしたことの是非は？賛否は？

2020(令和2)年8月31日記